

多人数会話において修復はどのように生じるか — コミュニケーションにハンディキャップを抱える人を含む 雑談データを通じて —

Repair Sequences in Multi-Party Conversation: An Analysis of Excursive Talks with the Communication-Handicapped

榎本 美香[†], 岡本 雅史[‡]
Mika Enomoto, Masashi Okamoto

[†] 東京工科大学, [‡] 成蹊大学
Tokyo University of Technology, Seikei University
menomoto@media.teu.ac.jp, explicature@gmail.com

Abstract

This article aims at investigating what is actually going on in repair sequences occurring in multi-party conversation by analyzing the data of excursive talks with the communication-handicapped. The objective is to find out some idiosyncratic features of repair sequences in multi-party conversation in view of the participation framework and the cognitive status of each participant. Our analysis suggests that repair sequences are shared not only between a speaker and a hearer, but among all the participants to contribute the troubles to establish a common ground, which sometimes constitutes the ‘consensus-building phase’ of repair sequences.

Keywords — multi-party conversation, repair sequence, the communication-handicapped, common ground, consensus-building phase

1. はじめに

教室で授業中にある生徒が手を上げて質問し、教師がその質問に答えたとする。以降、別の生徒が全く同じ質問を行ったとしたら、先ほどのやりとりを聞いていなかったのかと叱責の対象となるであろう。このように、多人数が参加するインタラクションでは、その中のある参加者同士が行ったやりとりの内容を、そのインタラクションに参加する全員が共有していくことが前提となる。

Clarkら[2]は、会話とは、一発話ごとに発話された内容を参加者たちの共有基盤(common ground)に追加していく営みであると述べている。そして、重要なことは、ただある発話が発されるだけでなく、それが聞き手たちに理解され受け入れられた段階でこの共有基盤が成立することである。従って、会話でのやりとりは、ある発話の提示とその発話の受理という対から構成されると考えられている[2]。発話の受理がなされたかどうかは、‘I see’ ‘uh huh’ などといった理解の表明、提示された発話

の理解を前提とする適切な次の発話、相手発話の例証などといった聞き手の次発話で示される様々な証拠から推定できる[1]。

逆に、聞き手が話し手の発話を何らかの理由によってよく理解できなかった場合、そうした発話の受理が不可能となり、聞き手は一つのトラブルを抱えることになる。それを解消するために、聞き手は話し手に元の発話の「修復(repair)」を要求し、話し手がそれを修復することで元の会話に復帰する。一方、聞き手がそうしたトラブルに気づく前に話し手の方で修復する場合も存在する。

本研究は、こうした会話における修復が多人数インタラクションにおいてどのような構造を持ちうるかについて、認知的な共有基盤化という観点から健常者とコミュニケーション障がい者を含んだ会話データを基に考察する。

2. 多人数会話における修復は何が異なるのか？

従来、会話分析で主張されてきたのは、修復およびその開始がトラブル源(trouble source)となる発話を行った話し手自身によるものか、聞き手(=他者)によるものかによって、その連鎖構造が異なったパターンに分けられるということであった[5]。しかしながら、3人以上の参加者からなる多人数会話における修復を観察すると、必然的に複数の「他者」が存在し、その中の誰が修復を開始するか(repair initiation)、また誰が実際に修復を実行するか(repair execution)が問題となる。

例えば、Egbert[3]は多人数会話における他者修復開始(other-initiated repair)の事例を分析し、その特徴として(1)二人以上の聞き手によって同一のトラブル源に対して修復が開始される場合や、(2)トラブル源の話し手が修復する前に別の他者によって修復が試みられる場合、さらには、(3)修復開始が会話場への入出装置として用いられ、単一の会話場から二つの同時に生起する会話

場へ分裂 (schisming), ないしはその逆方向への統合 (merging) といった参与枠組みの変容をもたらしたりすることを挙げている。

一方, そうした修復連鎖 (repair sequence) に直接参与しない他者の振る舞いについても共有基盤の観点から無視できない。こうした修復連鎖を各参与者の理解度という認知的な観点から考えると, 修復開始する他者はトラブル源に対して理解できなかったという自己の認知状態を明示的に提示していると言える。しかし, それを行わない他者は修復開始とは別の手段によって修復連鎖に非明示的に関与しているのではないかと考えられる。このように, 修復連鎖における各参与者の認知状態の違いとその表出の有様を多人数会話において見出すことが本研究の目的の一つとなる。

このように多人数会話における修復連鎖の問題を相互行為レベルと参与者の認知レベルの両面で捉えるならば, 認知機能の不全によってコミュニケーションを円滑に進めることに困難を抱えるコミュニケーション障がい者 (the communication-handicapped; 以下 CH) が含まれた多人数会話の観察を通して, 両者のレベルの相互関係がより明確に浮かび上がる可能性が高いと予想される。

3. 先行研究: 会話における修復の担い手と位置

Schegloffら [4] も Clarkら を引用して, 話し手があるターン (T1) を発したとき, その次になされるターン (T2) は聞き手の T1 に対する理解が示される場所 (共有基盤化がなされる場所) であると述べている。そして逆もまたしかりであり, この場所は, もし聞き手が提示された発話の理解に困難をきたした場合は, その発話の受理ができないことを示す場所でもある。

聞き手は, 話し手の発話の聞き取りや理解に困難を生じたとき, T2 の位置においてその問題を取り除かねばならない。また, T2 で示された聞き手の理解に問題があれば, さらにその次のターン (T3) において T1 の話し手はその問題を取り除かねばならない。Schegloffら [4, 5] は, これらの位置で生じる聞き取りや理解の問題を解決するための修復連鎖には以下のようなものがあるとしている¹。

(1) T2位置での聞き手による修復の開始とT3位置での話し手による修復の実行

T1: [トラブル源 trouble-source]
T2: [他者開始 other-initiation]
T3: [自己修復 self-repair]

¹[5]では, T1位置で話し手自身が修復を開始・実行することが最も好まれる形であるとしている。ただし, こうした自己開始・自己修復では聞き手の理解・無理解の証拠が提示されないため, 本稿では議論の対象から省くこととする。

(例1) [5]excerpt 26

T1:A: Have you ever tried a clinic?
T2:B: What?
T3:A: Have you ever tried a clinic?
:B: No, I don't want to go to a clinic.

T1に何か聞き取りや理解の困難を生じさせるトラブル源が含まれていたとする。このとき, T2において聞き手(T1の話し手以外: other)が修復を開始する。これを受けて, T1の話し手は自身で修復を実行する。(例1)で, おそらくBは, T1のAの発話に聞き取りの困難を感じたのであろう。T2位置において'What?'と聞き返している。これに対して, AはT3位置で再度T1で発話した内容を繰り返すことによりその問題を解消している。T2におけるBの聞き返しが修復の他者開始であり, T3におけるAの発話が自己修復である。このような他者開始の特徴は, T1の終了時点よりわずかに遅れて開始されることである。これは, できれば, T2の開始前にT1の話し手自身が修復を開始してくれることが期待されているためとされる[5]。

(2) T2位置での聞き手による修復の実行

T1: [トラブル源]
T2: [他者修復 other-repair]

(例2) [5]excerpt 64

T1:Ben: Lissena pigeons.
(0.7)
T2:Ellen: //Coo-coo::: coo:::
T2:Bill: //Quail, I think.
Ben: Oh yeh?
(1.5)
Ben: No that's not quail, that's a pigeon,

これは, T1のtrouble-sourceに対し, 聞き手がT2位置で修復を実行してしまうというものである。(例2)では, T1のBenの発話に対し, EllenとBillがほぼ同時に修復をしている。ただし, こういった他者修復が生じることは極めて稀であり, 生じたとしても冗談や不確かなものを確認するという形式が発話に用いられることが多いとされる[5]。

(3) T3位置での話し手による修復の開始と実行

T1: [トラブル源]
T2: T1に対する誤解の呈示
(display a misunderstanding to T1)
T3: [自己開始 self-initiation][自己修復]

(例3) [4]excerpt 5

T1:Dan : Well that's a little different
from last week.
T2:Louise: heh heh heh Yeah. We were in
hysterics last week.
T3:Dan : No, I mean Al.
:Louise: Oh. He...

これは, T1を理解した上で発話したはずのT2の聞き手の発話が, 実は理解していなかったことを

示す証拠となってしまう場合の修復連鎖である。この場合、T3位置で、T1の話し手から聞き手の誤解を正す発話がなされる。(例3)では、T1でDanが言及している対象はA1という人物であったが、それが明言されていなかったために、Louiseは自分たちのことと受け取ったようである。T2のLouiseの誤解に基づく発話の次の位置(T3)で、Danは言及対象がA1であると修正している。

4. 修復連鎖における参加者の認知状態

4.1 話し手と聞き手の区別に基づいた修復構造

以上3つのパターンがT2以降に聞き手の無理解や誤解が示されることによってなされる修復の連鎖構造である。これを認知的観点から考えると、話し手と聞き手の心内の状態と表出される発話は図1、図2の2パターンによって表わすことができる。

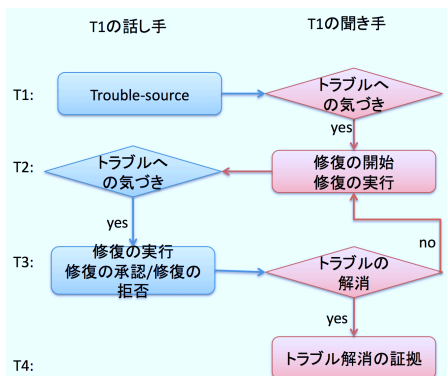


図1 T2位置でT1の聞き手が修復を開始/実行する場合

図1は修復連鎖(1)(2)として表されるような、T1の聞き手がT2位置で修復を開始ないしは実行する場合である。T1位置でその話し手によって修復がなされなかったということは、この時点でトラブルに気づいているのはT1の聞き手のみである。T2位置でその聞き手が修復を開始ないしは実行するに及んで、T1の話し手はT1に含まれていたトラブルを誘発した箇所へ気づき、T3位置で修復を実行ないしT2でT1の聞き手によってなされた修復の実行を承認あるいは拒否することで、T1の聞き手の聞き取りや理解に関するトラブルを解消する。T1の聞き手はT4位置でトラブルが解消されたことを様々な受理の方法によって示すことになるであろう。ただし、T3位置での修復が不十分であれば、トラブルが解消されるまで修復が繰り返して実行されると考えられる。

図2は修復連鎖(3)にあるようなT3位置でT1の話し手がトラブルを修復する場合である。T2位置

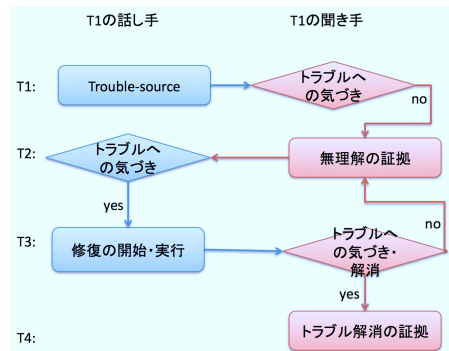


図2 T3位置でT1の話し手が修復を開始・実行する場合

でT1の聞き手が修復を開始しなかったということは、その位置ではその聞き手は自身のトラブルについてまだ気づいていないことを示す。そして、T2位置でのT1の聞き手の発話によって無理解の証拠を示されたT1の話し手はこの段階でようやくその聞き手のトラブルに気づくことになる。そこで、T3位置で修復を行うが、これによりT1の聞き手は自身のトラブルに気づくと同時にそれを解消することになる。ただし、T3での修復が不十分な場合は、さらに修復が繰り返されるであろう。

4.2 複数の聞き手を考慮した修復構造

ただし、これらの修復の構造は、修復の担い手がT1の話し手かT1の聞き手かという二項対立に過ぎない。多人数会話を対象とするなら、必然的に複数のT1の聞き手が存在し、その聞き手たちの心内状態は常に食い違う可能性を孕んでいる。聞き手を複数人にしたときの認知状態の変化のヴァリエーションとそこで取られる表出行動を模式化したものを以下に示す。

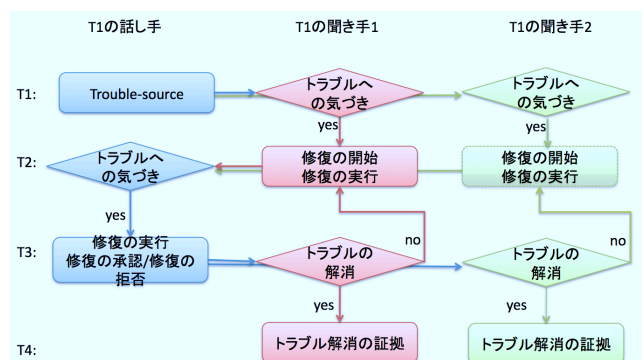


図3 T2位置でT1の聞き手が全員修復を開始/実行する場合

図3はT1位置で聞き手が全員トラブルを抱えておりそれに気づいた場合の、各参加者の認知状態と表出される発話を示している。これは、図1の複数のT1の聞き手への拡張版である。ここでは、

第2の聞き手も第1の聞き手と全く同じ心内過程と表出行動をとるものと見なしてある。

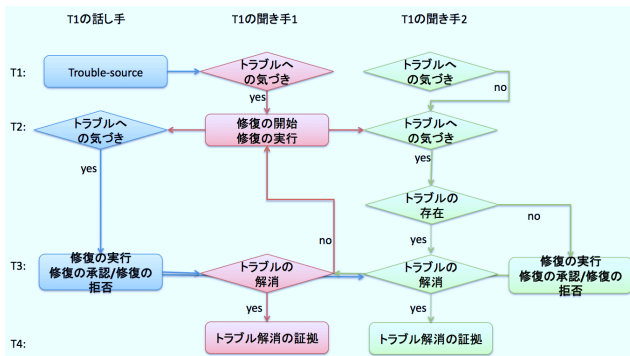


図4 T2位置であるT1の聞き手が修復を開始/実行する場合

図4は、T1位置である聞き手はトラブルに気づき、別の聞き手はトラブルに気づかなかった場合を示している。トラブルに気づいたT1の聞き手がT2位置で修復を開始ないし実行するとき、T1の話し手とその他のT1の聞き手はトラブルの存在に気づくであろう。もしT3位置でT1の話し手が修復を実行ないしT2でなされた修復に対する承認か拒否が双方のT1の聞き手のトラブルを解消するなら、T4でその証拠が示されるであろう。しかし、もしT1の聞き手のうちトラブルを抱えていない者がいれば、T3位置で話し手の代わりにその聞き手が修復を実行することが可能になるかもしれない。

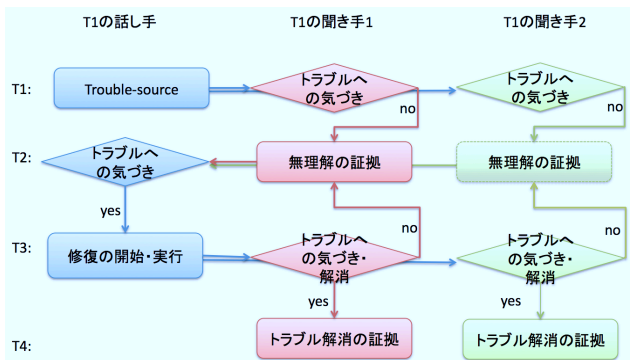


図5 T3位置でT1の話し手が修復を開始・実行する場合

図5は、T1の聞き手全員がトラブルを抱えているにもかかわらずその存在に気づいていなかった場合を表す。このとき、どちらかの聞き手がT2位置で無理解の証拠となる発話を行うことで、T1の話し手はトラブルの存在に気づき、T3位置で修復を行うであろう。これによってT1の聞き手たちは、トラブルへ気づくと同時にそれが解消されることになる。ただし、一度の修復でトラブルが解消されない場合は、再度修復連鎖を繰り返すであろう。

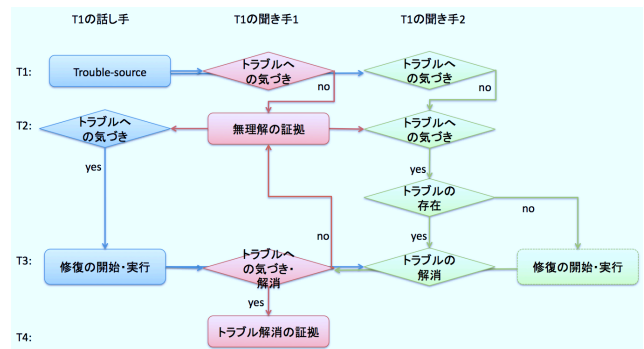


図6 T3位置でT1の話し手が修復を開始・実行する場合

図6は、T1の聞き手全員がT1位置でトラブルの存在に気づいていなかった場合である。そのうちの一人の聞き手が無理解の証拠をT2で示すと、トラブルの存在に話し手と他のT1の聞き手はそのトラブルに気づく。もしT3位置でT1の話し手が修復を実行ないしT2でなされた修復に対する承認か拒否が双方のT1の聞き手のトラブルを解消するなら、T4でその証拠が示されるであろう。しかし、もしT1の聞き手のうちトラブルを抱えていない者がいれば、T3位置でT1の話し手の代わりにその聞き手が修復を実行することが可能になるかもしれない。一方、もしT1の聞き手が全員同じトラブルを抱えているなら、それらの聞き手全員がまたT1の話し手の修復によってトラブルを解消するであろう。

上に挙げた模式図では、複数のT1の聞き手が同様のトラブルを抱えているとき同じような発話をするという仮定しているが、もちろん、修復を明示的に表出しない聞き手がでてくることも十分考えられる。修復を明示的に行わないT1の聞き手は、(i) 修復開始した他者へ頷きなどによって同調を示すことで自己の認知状態を非明示的に提示したり、(ii) そうした修復連鎖を単に見守り反応を示さないことで、自分が当該トラブルに巻き込まれていないことを示唆したり、(iii) さらには、話し手の修復時点に同調を示すことで自己の認知状態が話者と一致していたことを示すなど、さまざまな手立てで修復連鎖に関与しているのではないかと考えられる。本研究の目的は、こうした各参与者の認知状態の違いが修復連鎖上でどのように表出されるのかを明らかにすることである。

5. 分析資料

分析資料として、精神障害や高次脳機能障害などの病名が与えられた人々(the communication-handicapped; CH)と健常者(the normal; N)の組み合わせからなる3人会話を用いる。CHは、知覚・記憶・学習・思考・判断などの認知機能の不全のた

め、コミュニケーションを円滑に進めることに支障をきたすことがしばしばある。彼らは会話の中の脱線、独自の語・文法の使用、無関連な応答、発話の中断など会話トラブルの元となる振る舞いを取りがちである。従って、CHを含む会話では、本研究で対象とする修復が頻繁に生じる。そして健常者が含まれることで、トラブルが見落とされたり解決しないまま終わることが少なくなると考えられる。そこで、本研究では以下のデザインで収録されたCH 2名とN 1名の3人会話3組を分析対象として用いる。

会話参与者 : CHは精神科病院付属のデイケアに通っている人を対象とした。入院ではなく通院を行っているCHを対象としたのは、症状が比較的落ち着いており、30分程度の会話への参加が大きな負担にならずに可能なためである。Nは彼らと普段接している施設側スタッフ、および会話研究者である。施設側スタッフを含むケースでは会話に参加する3人は全員親近性が高い。

会話の設定 : 参与者たちは簡易収録室において、丸テーブルに等間隔で着座した状態で会話を行った。会話開始時の話題はサイコロを振って決めるが、途中でサイコロを何度振りなおして話題を変えても、サイコロの目にない話題を話してもよい旨を教示した。会話時間は約30分程度である。

音声・映像の記録 : 各参与者の音声は、単一指向性説話型マイクロフォンを通じて別々のトラックに録音した。また、各自上半身と円座全体の映像を4台のデジタルハンディカムで録画した。分析にはこれらの記録データを用いた。

6. 事例分析

6.1 T2位置で聞き手が全員修復を開始/実行する場合

聞き手が二人とも、ある発話に対して同時にトラブルを抱える事例をみてみよう(図3のパターン)。AとBがCH、Cはデイケアルーム専属の作業療法士である。(例4)は会話開始直後に、収録環境での会話に緊張するというAとCのやりとりの後の会話である。

(例4) #1831 120.6544-131.5826

01 C: Bさんは?
02 A: Bさんは?
03 T1 B: ん:(U_わしもなんともない)
04 B: ㄱ<笑>
05 A: ㄴ<笑>
06 T2 C: ㄴん?
07 T2 C: なになになにない?=
08 T3 A: =何?
09 T4(T1') B: (U_ともないよ)=
10 B: =<笑>
11 T2' C: =ㄱなんともないよ:
12 T2' A: =ㄴなんともないの?
13 T3' B: ん=
14 T4' C: =そっㄱか:(0.9)うんうん
15 T5' A: ㄴふーん
16 C: そっか最初からじゃあこれ
17 A: じゃまわしましょうか?これ

01, 02でAとCは連続して、Bは緊張するかという話題を振っている。これに対するBの応答03は、非常に早口で不明瞭な発音でなされ²、聞き手の聞き取りに問題を生じさせるT1となる。06, 07のCの発話は、聞こえなかったことを問い返すもので、T2位置での修復開始とみなせる。08のAの発話は07末尾に0.2秒ほど重複して開始され、同様の内容を問うている。この位置は、[5]によればT1の話し手Bによって修復が実行されるT3位置であるが、Aの発話はそのBを押しつけて、この位置に滑りこむように入ってきている。このことによって、T1の聞き手であったAとCは、自分たちがT1の発話を聞き取れなかったというトラブルを抱えていることをディスプレイしている。これらの発話に対し、BはT4位置で、先のT1の発話を繰り返している(09)。ところが、この発話もまた極めて不明瞭に発音されており、T1でのトラブルを再度繰り返すものであったため、新たなT1(T1')となる。今度は、その09の発話を反復する形で、AとCが全く同時に発している(11,12)。T1'に対するT2'である。これに対しT3'となる位置で、13でBは「ん」と承諾を与えている。そして、さらに興味深いのは、このT3'に対して、CとAは、「そっか:(0.9)うんうん」(14)、「ふーん」(15)とすぐさま、承諾を示す発話を行っていることである。これらの発話はそれぞれ、T4', T5'の位置で生じている。ここは、T1'~T3'が生じなければ、T5, T6の位置で生じた発話である。

(例5)も二人の聞き手が同時にトラブルを抱える例である。BとCはCH、Aは会話研究者である。この箇所は「服選びは楽しい」「この服は安かった」という話題に続く部分で、Cが精神科医の先生から指摘されて、パジャマから洋服に先程着替えたことが話題にのぼっている。

(例5) #0141
20 B: =先生も(W_オワッ|おっ)しゃったもんね:=
21 C: =うんおわっㄱた
22 B: ㄴゆってたわよねㄱ:
23 A: ㄴはいはい=

(例5) #0141

20 B: =先生も(W_オワッ|おっ)しゃったもんね:=
21 C: =うんおわっㄱた
22 B: ㄴゆってたわよねㄱ:
23 A: ㄴはいはい=

²転記中に用いた(U_)記号は、その部分が非常に不明瞭に発音されていることを表す。=記号は後続発話が先行発話の終了後間髪入れずに発されたこと(latching)を示す。ㄱなどの罫線記号は重複開始位置を示す。()内の数字は前後の間の秒数を示す。

24 C: Lうん=
 25 B: =ね Γ:ね:
 26 T1 C: L今日はパジャマか明日はスカートで
 27 (0.9)
 28 T2 B: あ Γそうおしやれして
 29 T2 A: Lあーなるほど
 30 T3 A: おしやれしてね=
 31 T4 C: =うん
 32 T5 B: Γ明日も
 33 T5 A: Lそーやね=
 34 C: 貰い貰いもの
 35 B: Y先生ね
 36 A: ええ
 37 A: あのー(0.4)お話があんのよね

抜粋部分直前で、AがCに「さっきまでパジャマ着てたもんね:」と言い、20はそれに呼応して「精神科医の先生からも言われていた」ということを指摘している。しかし、このやりとりに続くCの発話「今日はパジャマか明日はスカートで」(26)は、話題の連続性が感じられない発話である。AとBは一瞬言葉を失い、Aは助けを求めるように大仰にBに振り向く(27)。T2位置でBは、「あそうおしやれして(明日はでかけるのね)」(28)という解釈の可能性を示すことでこの話題の飛躍というトラブルの修復を実行する。ほぼ同時にAもこれに同意し(29)。Cに向き直って「おしやれしてね」(30)と確認をT3位置で行う。T4位置でCは30への受諾を行う。これに対し、T5位置でBとAはほぼ同時に承認を行っている。

これらの例から、T1発話に対して同時にトラブルを抱えた聞き手たちは次のように振舞うことがわかる。

1. T2位置である聞き手(H1)が修復の開始や実行を行うのに連動させて、T3位置で他の聞き手(H2)も同様の修復を開始したり、H1が実行した修復の承認を行う。
2. T1を行った話し手(S)はT4位置で修復の実行か実行された修復の承認(あるいは拒否)を行う。
3. T4, T5位置で聞き手たちはそれぞれT3の修復の実行や修復の承認に対する承認を行う。

6.2 T2位置で一人の聞き手だけが修復を開始/実行する場合

6.2.1 T2によって他の聞き手にもトラブルが顕在化する場合

T1においては二人の聞き手のトラブルへの気づきが異なるが、T2である聞き手によって修復が開始されると、もう一方の聞き手も同様のトラブルへの気づきが発覚する場合の例をみる(図4のパターン)。

(例6) #1831 686.8645-712.1800
 40 B: 付き合うっ(W_ツテモ|て言っても)
 41 B: (D_キ)(W_キタツ|来た)のは:
 42 T1 B: 今年(0.9)今年の(0.3)(U_三か五(W_口|頃)かな)=
 43 T2 A: =今年まだ二月
 44 T3 B: Γ二月でしょ
 45 C: Γ<笑>
 46 A: L<笑>
 47 T4 C: Γ去年かな?
 48 T4 B: L去年だっけ
 49 T5 C: Γうん去年かな
 50 T5 B: Lきつと:来たの
 51 T6 A: Γふーん=
 52 T6 C: Lうんうん=
 53 B: =去年今年だよ
 54 C: Γん?今年は=
 55 A: L(W_ホトシ|今年)のいつ?=
 40-42でBは『彼が来たのは今年の三月か五月頃』という意味のことを言う。すかさずAは「今年まだ二月」(43)と修復を開始する。これを聞いたCは笑う(45)ことによって、Bの発話の矛盾に気づいたことを示す。しかし、BはT3位置で「二月でしょ」(44)とAの発話を繰り返すだけで、修復を実行しない。T4位置で、Cが代わりに「去年かな?」(44)と修復を実行しようとするのとBが自身で「去年だっけ」(48)と修復を実行するのがほぼ同時に起こっている。また、T5位置ではCの再確認(49)とBの確証発言が同時に起こっている。これに対して、AとCはほぼ同時にT6位置でそれに対する承認発話を行っている³。このように二人の聞き手が一緒に修復への承認を行うのは6.1と同様である。このような例では、修復の開始時こそ二人の聞き手の認知状態が異なったものの、T2がなされると同じトラブルに直面することに修復を開始しなかった聞き手も気づくことにより二人の認知状態が一致するという点では、途中から6.1と同様であり、修復連鎖も同様の終了の仕方をするとみなせるであろう。

この例から、T2発話によって他の聞き手にもトラブルが顕在化する場合、聞き手たちは次のように振舞うことがわかる。

1. T2位置である聞き手(H1)が修復を開始する。
2. T3位置でT1の話し手(S)は修復を実行する。
3. T4位置以降、もう一方の聞き手(H2)も修復の実行に関与する。
4. 修復が実行されると、聞き手たちはそれぞれ修復の実行に対する承認を行う。

³ただしこの例では、Bが自身の発言を撤回したため(53)、再度『彼が来たのは今年のいつか』という問題についての話題が展開していく。

6.2.2 他の聞き手がトラブルを抱えていない場合

続いて、T1に対して、聞き手たちの認知状態が異なる場合の事例を分析する。(例7)は、一方の聞き手はT1の聞き取りや理解ができ、もう一方の聞き手がそれにトラブルを抱えた場合の例である。

(例7) #1831 642.8563-655.7958

60 B: 何年か経って: 「からさ:=
61 C: 「うん
62 A: 「(W_ウーン|うん)
63 C: 「うん
64 T1 B: ° ホテル行ったの°
65 C: うん
66 T2 A: 「え?
67 C: 「<笑>
68 A: <笑>
69 T3 B: ° ホテル°
70 T4 A: はい
71 C: <笑>
72 T5 C: うん=
73 T6 A: =(W_ウーン|うん)=
74 C: ° そっか°
75 B: ° そうなの°
76 A: (W_ウーン|うん)
77 C: ° 行ったの°
78 B: ° 行ったの°
79 A: 「(W_ウーン|うん)
80 C: 「うん
81 B: (D_フ)そしたらその:想像はおまかせします

(例7)はCが恋の話を語るという場面である。Cに「それでそれで?」と促された直後、60, 66のBの発話がなされる。64の「° ホテル行ったの°」⁴という発話はほとんど聞き取れないほどの囁き声で、BはCの方を向いてほとんど口パクで話している。そこで64はCには解るが、Aにはほとんど聞こえない発話となり、聞き手間で理解に差が生まれる。Cは「うん」(65)という発話や笑い(67)によって通常の理解の証拠をしめしているが、Aは「え?」(66)と修復を開始する⁵。修復連鎖の第2番目の位置であるので、これがT2発話となる。T3位置でBは今度はAに向かって囁き声で「° ホテル°」と答える。今度は、それを聞き取れたことをT4位置となる70で示している。そして、この修復の間黙っていたCがここで「うん」(T5位置)と発話すると、ひき続いてAも「(W_ウーン/うん)」(T6位置)と発話する。これら二つの発話は何を行うものであろうか。その後のCの発話(74)はBに向かって囁き声で開始されており、64で開始されたBの内緒話の続きを行なおうとする発話である。従って、この直前の73発話で修復連鎖が終了したと参与者たちがみなしていることは明らかである。

⁴転記中の°記号で括られた部分は非常に小さな声であったことを示す。

⁵ただし、68で笑っていることから、この話が声を大にして言えない内緒話であるという話のモードは理解しているようである。

我々はこのT5, T6の発話を修復終了への合意発話と捉え、T1に対する共有基盤が成立したことを示すものとする。しかも、これらの合意発話はT1発話の聞き手二人ともが行うようである。

Schegloffらの先行研究では、修復連鎖として修復の開始と実行を誰が行うかにのみ焦点があたっていたが、多人数会話の修復連鎖の中には実際に修復が履行される〈修復フェーズ〉と終端部での〈合意形成フェーズ〉が明示的に存在する場合があるという仮説をここでは提唱する。多人数会話においては、何らかのトラブルが生じた際に、トラブル源となる話者と修復を開始する参与者だけでなく、その場にいる全員の問題として、当該発話への理解度が問われることになる。その理解度をまさに共有基盤化として各参与者が示すことが合意形成フェーズとして必要になると考えられる。

この例から、一方の聞き手はT1の聞き取りや理解ができ、もう一方の聞き手がそれにトラブルを抱えているといった場合には、聞き手たちは次のように振舞うことがわかる。

1. T2位置である聞き手(H1)が修復を開始する。
2. T3位置でT1の話し手(S)は修復を実行する。
3. T4位置でH1はその修復への承認を行う。
4. T5位置で、聞き手たち(H1, H2)は修復を完了することへの合意を示す。〈合意形成フェーズ〉

6.3 T3位置で話し手が修復を開始・実行する場合

今度は、T2位置で聞き手が修復を開始するのではなく、無理解や誤解に基づいた発話をした段階で、トラブルが顕在化する事例を分析しようと思う。ただし、今回分析したデータにはこれに相当する事例が少なく、特に聞き手が二人とも無理解であった例(図5のパターン)は存在しなかった。以下では、聞き手の一人が無理解や誤解を提示した場合の事例(図6のパターン)をみる。

(例8) #1831 1666.1392-1676.8376

90 T1 A: (W_ウーン|うん)甘えたいんでしょうね
91 A: 「きつとねどっかでね
92 C: 「うんうん
93 C: ど「うしてもね
94 A: 「(W_ウーン|うん)
95 T2 C: でも女「の子だからこうつぱつちやう:=
96 A: 「でもほらう:
97 T3 A: =ちやう娘じゃなて息子「え:息子
98 T4 C: 「あ息子さん?=
99 T5 A: =う「んうん
100 T6 C: 「うんうん
101 A: でもさほら(0.3)もういい年だから

(例8)は、Aが家での子供たちとの交流について語っている場面である。90が始まる30秒ほど前からAは息子のエピソードを語っている。この語りに対するCのコメント(95)は、Cがこの語りを息子ではなく娘の話として聞いていたことを示すものであった。Aは96で開始した発話を即座に中断して、「ちやう娘じゃなて息子」(97)と訂正をしている。この例はT3位置におけるT1の話し手による自己開始・自己修復に相当すると考えられる。CはT4位置で「あ息子さん?」(98)という問い返しを行ない、AがT5位置でこれを承認する(99)とCはすばやくそれを承認する100を行っている。このようにT3位置で生じた修復では、T1の聞き手(T2の話し手)が、「あ」などのマーカーを用い、心的状態が変化したことを示す発話がT4位置に続くと考えられる。そして、T5にはその変化を正しい理解に達したものとして承認する発話、T6ではそのことへの承認発話が続いている。

なお、この例では3人目の参与者Bが関与していないが、Bはこの話題が開始された300秒前からまったく反応を示しておらず、この後もさらに150秒ほどまったく発話をしない。ここで3人目のBが関与しないのは彼女特有の事情があったのかもしれない。

次に、3番目の人物の介入によりT2話者の無理解が取り残される例をみる。

(例9) #1831 1250.4838-1263.0317
 110 T1 C: Bさんは?(0.3)おうちで:(0.4)
 111 T1 C: 夜は何してんですか?
 112 T2 (0.4)
 113 T3 C: あの帰ったあとあのあと(0.6)
 114 T3 C: デイケア終わって帰って(0.5)
 115 T3 C: うんと:=
 116 T4 A: お茶飲むんでしょ
 117 T5 C: お茶飲^らむの
 118 T6 B: ^らお茶[。]
 119 C: <笑>
 120 T7 A: あたしねBさんち行ったことあるんですよ
 デイケア終わってから

(例9)では、CがBに向かって質問をした発話(110, 111)がT1となる。この発話には「Bさんは?」という明示的な呼びかけが使用され、Cの視線もBに向けられているため、Bを次話者として選択する隣接対第一部分である。ところが、BはCを見つめたまま反応を返さない。112では0.4秒の沈黙が訪れており、隣接対第二部分の不在が観察される。CはT1発話が理解されなかったための反応と受け取り、続くT3位置で、T1発話を言い直している。途中でAが割って入り、Bの代わりにT1, T3への応答をT4位置で行っている。「お茶飲むの」というCの反復に、Bは小声で「^らお茶[。]」と繰り返すが、これはAの発話や笑い声に打ち消されるほどの声

であり、CやBには聞こえていなかったであろう。その後AがBの代わりに答えられる理由が説明される。

これらの例は、多人数会話でのT3位置における自己開始・自己修復の一部の例に過ぎず、これだけで一般化することは難しい。(例8)では修復連鎖に直接関与していない聞き手の存在のために、多人数会話であるにもかかわらず通常の二者会話のような様相を呈しており、一方(例9)では、T1の直接の受け手の無理解が修復されるはずであるのに、それが修復されないままとなってしまうからである。

6.4 考察

6.1節と6.2節での分析から分かるのは、多人数会話における修復連鎖の特徴として、参与者全員が何らかの形で修復連鎖に関与することで会話の共有基盤化を達成するという点である。

6.1節のように複数の聞き手がトラブルを抱えた場合は、[3]で指摘されたようにそれらの聞き手たちが同一のトラブル源に対して修復開始を行うことが確認された。さらに、そうした複数の聞き手による修復開始が一つの共通の目的で相補的になされるというよりも、むしろトラブルを抱えたそれぞれの聞き手が自己の認知状態を全員にディスプレイすることに目的があるように見える点が興味深い。実際、(例4)においては、二人目の聞き手による修復開始が話し手による修復の実行に先んじようとまでして自己の認知状態の表明を行っていた。しかも、話し手による修復に対する承認についても各人がそれぞれ別のターンで行っているのが観察された。このことは、話し手がもたらしたトラブルに対して複数の聞き手が修復連鎖に関わることが、当該トラブルの解消というよりも会話の参与者の認知状態の共有基盤化として必要であるため、各人の明示的な認知状態の表明とその共有が行われることを示唆している。

一方、6.2節の観察によれば、一人の聞き手によって修復開始が行われる場合には聞き手の認知状態は二種類ある。一つは、一人の聞き手によって修復開始がなされることで、別の聞き手がそれを認知し自分のトラブルを発見する場合である。その時には、修復を開始していないこの聞き手も、話し手の代わりに修復を実行しようとしたり、修復の承認を行うなどして修復連鎖に関与していく。しかも、話し手による修復に対する承認についても各人がそれぞれ別のターンで行っており、これは6.1と共通する特徴である。

もう一つは、一方の聞き手が理解のトラブルを抱えていない場合で、そのときトラブルを抱えた聞き手と話し手の間で修復の開始と修復の実行、およびその承認が行われる。この間、トラブルを抱えていないもう一人の聞き手は静観しているが、この修復の終了時には修復を抱えていた聞き手と共にその終了に合意する発話を行う。この場合は、トラブル源～修復開始～修復実行といった一連の修復連鎖に加えて、さらに聞き手全員による修復の承認という共有基盤化がなされている。このことは多人数会話における修復連鎖の中には、直接の〈修復フェーズ〉に加えて、共有基盤化の目的でなされる明示的な〈合意形成フェーズ〉が存在する可能性を示している。もちろん、こうした明示的な共有基盤化としての合意形成フェーズが存在しない場合でも、多人数会話においては、トラブルに対する各参加者の認知状態を個別に表明することで共有基盤化を非明示的に達成していると思われる。

こうした特徴は、二者間対話よりも共有基盤化の問題が顕在化しやすい多人数会話固有の特徴であると考えられる。しかしながら、話し手が修復を開始・実行する6.3節の例に見られる修復現象はCHの存在が大きい。(例8)で修復連鎖に関与しない聞き手と(例9)で話し手に反応しないまま自身の無理解を解消しない聞き手は同一のCHである。通常であれば相づちや頷きなど何らかの形で会話に参加するはずであるが、この聞き手は前者の例において7分以上にわたってそうした反応を一切示さない。そして後者の例では、明示的な次話者選択がなされているにもかかわらず、返答という隣接ペアの第2部分を行わないなど、共有基盤化がどこまで達成されているのかの証拠が示されていない。重要なのは、こうした会話への参加度の低い参加者の存在が、他の参加者の振る舞いに影響を与え、その結果として6.3節のような修復連鎖が生じていることである。

先に述べたように、多人数が参加するインタラクションでは一部の参加者同士の問題を当該インタラクションの参加者全員が共有していくことが期待される。従って、一人の参加者がもたらすトラブルは参加者全員の共有基盤化の問題となるため、誰がそのトラブルに対して修復を行う責任があるのか、もしくは優先的に行わなければならないかなどの修復連鎖役割とでもいべきものが潜在的に生じ、参加者全員がそれに則って反応しなければならない。

しかしながら、これまで見てきたように、実際にCHとの会話データを観察すると、トラブル源となる参加者自身がそのトラブルに自覚的でない

い、つまり「トラブルへの気づき」がない場合や、その気づきの証拠を提示しない場合がしばしば観察される(例5, 9)。さらに、修復連鎖に明示的に関与しないために、健常者同士の会話では共有基盤化として参加者全員に関わるグローバルな問題となっていたものが、トラブルに気づいている人たちだけのローカルな修復連鎖としてのみ存在してしまう場合が存在する(例8)。

こうしたCHを含む多人数会話の観察は、一般的な修復連鎖そのものの問い直しに繋がる。3節の(例3)に見るように、Schegloffらの観察によればT3位置での話し手による自己開始・自己修復は聞き手の誤解によって生じた修復であった。これはT1の話し手が聞き手に誤解を生じさせているために、修復の責任を負っていると暗黙の裡に想定されている。しかしながら、CHを含む会話例を観察すると、(例9)のように表面的には修復を実行しているT1の話し手がトラブルを与えているように見えるが、実際には話し手の問いかけに全く答えられない聞き手が実質上のトラブルを引き起こしているのであり、その意味では(例9)のT2こそが真の修復連鎖におけるT1であり、もとの発話を言い直しているT3が他者開始としてのT2、もう一人の聞き手による助け舟としてのT4が他者修復としてのT3の役割を果たしていると考えられるのではないだろうか。この意味で、修復連鎖におけるトラブルとは本質的に参加者全員が対処すべき問題であり、その責任の所在や何が実質的なトラブルであったかは一概に確定できることではない。CHを含む多人数会話において生じる修復連鎖を、参加者の共有基盤化の問題として観察することは、こうした健常者同士では見えなくなっていた相互行為と認知の関係に新たな光を投げかけるのである。

7. 今後の課題

今回の分析では、多人数会話において生じる修復連鎖の構造とその特徴をコミュニケーション障がい者(CH)との会話データから捉えることを試みた。しかしながら、ここで扱われている事例はまだ少数のものに留まっており、どこまで一般化が可能かはまだまだ未知数である。また、CHを含む会話データを取り扱った根拠は先に示したが、多人数会話一般の修復連鎖の特徴を明らかにする上では、やはり健常者同士の会話データとの比較が必須であろう。さらに、多人数会話の特徴として話し手や直接の聞き手以外の参加者の存在が重要であることを述べ、その振る舞いについて検討したが、今回の分析では主に明示的な表出行動である発話や相づち、頷きなどの観察に留まってい

る。共有基盤化の問題を正面に据えて論じるためには、その他の非言語的な振る舞い(例. 視線や表情)の詳細な観察も必要となる、言い換えれば、会話の参加者はどのような明示的／非明示的な手立てで共有基盤化を達成しているのかを明らかにせねばならないだろう。

参考文献

- [1] Clark, H. H. (1996) *Using Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- [2] Clark, H. H., & Schaefer, E. F. (1989) "Contribution to discourse", *Cognitive Science*, Vol. 13, pp. 259-294.
- [3] Egbert, Maria M. (1997) "Some interactional achievements of other-initiated repair in multi-person conversation" *Journal of Pragmatics*, Vol. 27, No. 5, pp. 611-634.
- [4] Schegloff, E. A. (1992) "Repair after next turn: the last structurally provided place for the defence of intersubjectivity in conversation" *American Journal of Sociology*, Vol. 95, pp. 1295-1345.
- [5] Schegloff, E. A., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977) "The preference for self-correction in the organization of repair in conversation" *Language*, Vol. 52, No. 2, pp. 361-382.